

順次往生講式について

伊藤眞徹

(一)

我が国古来からの講会の種類を大別すれば、先づ講の意義を講演と解するものに、經典の講讚^①と論疏の講演^②がある。

他は集会を意味する講であつて、この中帰依の客体によつて仏、菩薩^③に別けらる。更に祖徳讚歎、祖恩報謝を目的とするものがあり、宗祖又は列祖及び通仏教的立場によるものと別けることが出来る。この他更に自己の滅罪生善後生善処の修道実践・信行増進を目的とするもの^④、及びその他を挙げることが出来る。しかるに講の字義について、「塩尻」卷五四には

或人云往生講なんといへる講の字義如何 念仏講なんと呼は構の字や書へき 構は合也結也集也なんと言書にもありと 予曰不然いたしへより朝廷の最勝講山門の三十講等木へんに書し例しなく 寛弘御記雲図抄なんと皆言べんに記せし 講はならはしと訓して凡其事にならふをいふ 集合の義にあらず(国学院大学刊行 本下卷五)とあつて、集合の義を否定している。しかるに元來講会が經典の講演講讚に源を發している以上、既に緇素僧俗の來集が予想せられるのであるから、講讚から結集の意を加味するに至り、更に結集が「ならふ」講の意を重視する講筵に發展するに至つたのである。かくて經論講讚の華麗な講

会と併行して、中古以来僧俗貴賤男女の障壁を撤去した、所謂同信的結集による、信行策励の実践的方軌としての講式の出現をみるに至つた。

雲林院の菩提講について、「中右記」承德二年（一一〇〇）五月一日の条に

一条尼上並寢殿御方令參雲林院菩提講給、予爲御供參入、四位少將定藏人少將師、前皇后宮亮定兼同被屬從、休息寢殿御方御堂件堂在雲林院西洞、講師登高座間、於堂中西北庇疎聞、講師院範先授三歸十戒、次說經、人々所供養經已及數十部、寢殿御方令供養名字功德品、始說法之間誠以隨喜、已時許事了、堂中竝座老少男女称南無声遍滿如雷、此講筵者故源信僧都爲結縁所被始行也（下略）

とあり、又「今昔物語集」卷一七の第一〇話に

其ノ後仁康道心ヲ発シテ、忽ニ大仏師康成家ニ行テ相語テ、不日ニ地藏ノ半金色ノ像ヲ造テ開眼供養シツ、其ノ後地藏講ヲ始行フ、何道俗男女首ヲ何テ掌ヲ合セテ来リ臨テ結縁ス

と記し、又同書卷一七の第三〇話^⑩には

下野国ニ薬師寺ト云フ寺有リ……而ルニ其ノ寺ニ一人ノ堂童子ノ僧有リ、名ヲバ蔵縁ト云ケリ……各力ヲ合テ一ノ堂ヲ造テ、仏師ヲ請ジテ等身ノ地藏菩薩一体ヲ造リ奉テ、其ノ堂ニ安置シテ、常ニ香花灯明ヲ奉テ日夜ニ不レ怠ズ、亦毎月廿四日ニ大ニ僧供ヲ儲テ、諸ノ僧ヲ集テ此レヲ施シテ仏事ヲ營ケリ、其ノ夜地藏講ヲ行フ、近隣ノ道俗皆来リ集テ聴聞シテ終夜礼拝シケリ

とある。此等の二三の例から推して、行業又は信仰の客体を紐帶とする同信同行者集会の法筵には、僧俗を別たす、貴賤を隔てず、人間（凡夫）として全く平等であり、衆庶に解放せられた法悦の場であることは、仏教の庶民化の途上において重視せられるところである。

中古に行われた各種の講について、「中右記」には前記の菩提講の他に、天仁元年（一一〇八）六月十五日の条に「今朝請湛秀法師始五斎日講」とあり、而も「期限一生之間永以可修也」と起請している。五斎日講とは五日弥勒、十五日阿弥陀、十八日観音、廿四日地藏、晦日釈迦の講之れである。又元永元年（一一一八）七月十五日には「午時

許參御堂孟蘭盆講」とあり、次いで保安元年（一一二〇）十月十五日に「在日野之間、今日先詣弥勒堂、山路不掃、踏紅葉行、諸僧集会、誦阿弥陀經、是恒例衆也、次逢黃昏時、此次令行阿弥陀講、誦十衆式之間、致一心之誠」とある。大治二年（一一二七）十月十五日には、「晝景誦講教禪聖人、供養阿称陀經、是依五要講也」とあり、同五年（一一三〇）十二月二十二日には「今日大殿於宇治御所、被行慈恩講云云」とある。「台記」によれば天養元年（一一四四）十二月十四日から十日間、鳥羽法皇は御饑法並に十衆講を修せられ、翌年七月十五日には「依例、於新堂、被行彌陀講、其次被供蓮華、奏赤白蓮華衆」とあつて、弥陀講により孟蘭盆が修せられている。更に「玉葉」には舍利講、彌勒講、往生講又は阿弥陀講の名称は各処に散見し、文治三年（一一八七）二月十八日の条に、「毎月所被修之仏事、四ヶ度也、於五日弥勒講者、依為故院御月忌、自崩御之刻、每月行之於自余三講、十五日阿彌陀講、廿日無レ力于勤行、而今月同皆所始修也」とあつて、藤原兼実自身恒例の講会仏事を定めている。

順次往生講式について

上來例記するところによつて知られるところは、約一世紀の間に各講会は、その本来の趣旨より転じて、追福の作善として行ぜられた一面が、浮彫せられてくることが判る。しかるに自身の往生業として修せられた講会について「日本往生極楽記」には延暦寺座主僧正昌延（九六）は、「毎月十五日招延諸僧、唱彌陀讚、兼令対論淨土因縁、法華奥義」とあつて、之れ恐らく阿弥陀講の濫觴をなすものであり、「拾遺往生伝」巻上に載せる安助上人（一〇四）は、「又迎三月三五、集衆講演、薰修有日」の勤めを積み、同巻下にある大法師頼運（延久年中一〇六九—一〇七四寂）は「本住三世間、亦好管絃、爰作衆曲、其詞云歸命頂礼弥陀尊、引接必垂給培、以此曲、毎月十五日、招伶人五六、勤修於講演、号曰往生講矣」とある。又同書には、永観（一一）は「若人問出世之要、答以念仏之行、又新造式、每十斎日、勤修往生講」とある。以上により往生講の系譜を跡付けられるようであるが、ここに注意すべきは、その成立史上、恵心の「二十五昧式」と、師が始修したと「中右記」に註する菩提講、迎講等の及ぼせ

る影響についてである。

古來多く修せられた往生講、阿弥陀講、弥陀講の内容については、明確に區別せられないものであつて、ここに同一の講を両様に称していた例として、後白河法皇が治承二年（一一七八）十二月二十三日、院において修せられた講について、「玉葉」には

今夕於_レ法皇宮_一、被_レ行_二往生講_一、毎月十五日可_レ為_二恒例_一事云々、大相国已下、堪_レ承管_二之輩_一応_レ召、但外人不_レ入_二此列_一云々

とあり、「百練抄」卷八には

於_レ院被_レ行_二阿弥陀講_一、有_二管絃助詠今様等_一兼日結構也とあつて、これ同一の法筵を、所帰の仏について阿弥陀講と云ひ、所修の究竟目的について往生講と云えるもので、十五日を恒例となすことは同様である。

(11)

講式の中正大藏經第八十四卷に收載せられるものは

薬師如來講式

一卷

最澄

往生講式

一卷

永観

愛染王講式

一卷

覚鏤

観音講式

一卷

貞慶

弥勒講式

一卷

同

四座講式

以上の如くであるが、中世初頭において貞慶、高辨、凝然^⑮等出で、多種の講式の出現を見るに至つた。しかるに浄土教講式としては、長西の「浄土依憑經論章疏目錄」(長西録)に

十乘講作法

一卷

源信

往生講式

一卷

永観

自行念仏私記

一卷 二十二丁真源

山法相

順次往生講作法

一卷

仁寛 日本天台

同 要行

一卷

同

同 講式

一卷 永久二年甲午 真源 日本天台
十二月十五日

の名を掲げている。

今、知恩院に襲蔵せられている「順次往生講式」一卷は縦九寸三分、横二二尺八寸三分、縑紙數十枚の卷子本で

あつて、各行一八字乃至二三字、墨で略楷を以て書写せられてゐる。奥書には

文治二年六月二日書写了 沙門信玄之本

とあり、その上に「信」の印文を押し、下方に蒐集者徹定の印を捺している。知恩院の所蔵に販する迄の本書の伝襲の次第と、信玄については明瞭でない。しかし「蓮門類聚経籍録」巻下に

順次往生講式

一卷

信玄

順次往生講式

一卷

叡山真源

の二書を列ねている。この記述によつて知られることは、無相文雄は恐らく、上記の知恩院本の如き奥書のある講式は、直接之れを見て居るが、真源の講式は、長西録の記載を襲踏して、之れを別本として取扱つて並記したものと思われる。更らにその製作年代については、長西録には永久二年甲午（一一一四）十二月十五日とあるが、此日付けは永観寂後二年、仁覚配流の翌年に当り、前記の如く仁覚、真源により往生講の作法又は式が作られたことは、南都三輪系の永観の往生講式に対し、北嶺天台の諸師として、深

順次往生講式について

き意図の存したことは見逃せないところであり、その始修せられた日の伝承を、長西が記したものと考えられる。又知恩院蔵本の奥書は、それより後七十二年後に書写したことを記し、「沙門信玄之本」とは、原作者名の普通を以て異字を之れに充てたもので、全く作者名を表示し、転写の人、又は所持者名を記したものとするには、余りにも偶然過ぎる感がある。無相文雄は「信玄之本」の四文字を作者と解し、「叡山真源」とは別人としたが、実は講式には別種があつたわけではないと思われる。

知恩院本の順次往生講式が、他の講式類と著しく趣きを異にする特色は、歌頌以外に、各段毎に舞楽と催馬楽の曲を附し、浄土欣慕の歌詞を挙げていることである。楽は想仏恋（想夫憐）、往生（皇靈）、万歳楽、倍慮、大平楽、三台、裏頭楽、甘州、郎君子、廻忽、五聖楽（五常楽）、蘇合の十二曲であり、催馬楽の曲は青柳、伊勢海、浅水、何為、遅生、走井、更衣、飛鳥井、道口の九曲である。平安朝末の曲名・歌詞の現存することは、歌謡史上注目せられるべきところである。

管絃歌謡が宗教儀礼に導入せられたことについては「古今著聞集」巻六に「讚仏敬神の庭、礼義宴饌の筵も、この声なければ其礼を調へず。故に興福寺の常楽会百花匂をおくり、石清水の放生会黄葉衣におつ」と、その所以を示している。されど宮廷諸大寺の法会以外に、藤原時代の月例の供養經の状について、「御堂関白記」の長和二年（一一〇一）三月十八日の条に

參皇太后、到於堂、令院□〔源カ〕僧都、申上仏經、初從今月、永毎月可供養由、女方同渡、上達部十二人來、殿上人有其數、為供仏有管絃事、月出後乘舟、數廻廻島、深更還來

とある、管絃供仏が仏事法会の從屬的供養の一要素であることは、同書の四月二十九日の説經においては、「例管絃供仏、而依国忌日停止」せられたことにより知られる。又それに奉仕する伶人には、隨時能力試験が行われたことは、翌月十八日の例供養經の際の、「召絃絃〔重複カ〕管者等試其能、是為供仏」とある記述によつて明らかである。次いで酒肴、作詩等が附帶したが、往生講に管絃詩歌が導入

せられた経路の、概略を辿つてみるに、和讚の唱詠は輕視することが出来なう。

千觀・惠心の後一世紀を隔、下賤頑愚の無名の老比丘尼の詠唱が、上卿の道心を勧発したことによつて「中右記」に詳細である。即ち大治二年（一一二七）五月四日の条に

入夜道心比丘不知名入來、先誦和讚、其声甚美、聞之自発道心、次高声念仏、事之問之、本是河内国住人、久為人妻不生子、輪過五十乞暇於夫、出家為尼、常在天王寺西門、偏專念仏也、今年已六十一、每思世間無常、弥以發心也、近日有要事暫在京都也、予見道心殊深氣色、共契往生極樂之事了

とあり、十樂讚を贈つてゐる。更に半世紀後「山槐記」の治承二年（一一七八）閏六月八日の条に

於院長講、次有往生講、毎月十五日可レ為恒例一事云々、大相国以下參入、可有管絃

とあり、同年十二月二十三日の院における阿弥陀講には、管絃の外朗詠今様が附加せられたことは既述の通りである。

因みに管絃詩歌等のみを独立せしめた仏事が法恩講であつて、「玉葉」の寿永三年（一一八四）二月二十二日の条に依_レ觀性法橋勸進、法印於_レ御堂_レ被_レ行_レ法恩講、年来之_レ勸云々、此行之本意、以_レ雜芸_一管絃詩歌等_一奉_レ供_レ養於_レ仏云とある。

僱馬楽の伴奏は琵琶、箏、笛、笙、和琴、篳篥等であつて、「古今著聞集」卷六には久安三年（一一四七）九月十三日、鳥羽法皇は天王寺念仏堂に於いて管絃あり、その時「歌並笛資賢、笙内大臣、篳篥俊盛朝臣、但不堪のよしを申てふかざりけり。琵琶信西、箏六波羅別当寛暹、法皇笛をふかせおはしますとて、沙門の身にて此事あざけりあるべしとて、障子にわかくれさせおはしましけり、御出家の後此たびはじめてふかせおはしましけり」とあり、次いで曲名を挙げ、後に「此外僱馬楽ありけるとかや、朗詠今様風俗など数反ありけり、資賢朝臣ぞつかうまつりける」とある。文献に表れたところは上の如くであるが、これを総合して考えれば、僱馬楽今様が盛行するに至つたのは十一世紀の

順次往生講式について

初めとせられるから、その後の一世紀間、遅くとも鳥羽天皇の御在世中に、採用せられたものと思われる。而して現在のところ順次往生講式がその最上限に位するものである。

(三)

知恩院本「順次往生講式」は、内容大いに分つて三門よりなる。即ち述意門、正修門、廻向門である。

述意門とは講会の趣旨を、弥陀觀音勢至乃至法界の一切三宝に告白するものであるから、従つて此講式の特徴、又はこれによつて修せられた往生の行業を知ることが出来る。初めに趣旨について述べると、「出離の妙因を結んで永く輪廻の故郷を別れ、往生の善根を種えて早く安養の仏土に到らんと欲せんが爲めに、弥陀の四十八願に依つて讚歎禮拜の誠を至し、觀經の十六想觀に寄せて発心修行の志を運ぶ」とあつて、無量壽經・觀經の二經によるものであり、二經によることは、正修門の譬頭に「聖衆來迎の望みを念へば、弥陀の悲願を憑むに過ぎたるはなく、往生極樂の業、極樂の依正を觀ぜんには如かず」とあり、又廻向門には、

「諸衆同心に重ねて仏に白して言く、我已に法の如く本願を称揚し、亦淨心を以て妙觀を憶想しつ、淨土の行業熏修己に了んぬ。往生の正因豈に之れに過んや」とある文によつて、往生の正因を称名觀念の何れとしたかは、自ら明らかなところである。

この講式は「但し今勤修するところは稍常の儀に異り、舊礼讃称念のみにあらず、兼ねては妓樂歌詠を以てす」と述べている如く、妓樂歌詠の付加せられているのを特異なる点とする。この妓樂歌詠を用いる所以については二由を明している。即ちその一は「當時には律呂音を調べて、暫らく散心を一境に静めんがためであり、他は「來世には絲竹曲を翫んで、遍く供養を十方に施さむ」がためである。且又仏教原理よりして「声仏事をなす、簫笛笙篳篥自ら法音方便に順じ、樂法界に即すれば、管絃歌舞中道一実を隔つる」ものでない。故に「仏道の資糧専ら樂音に在り」とせられ、近くは「此界の雅樂に准じて、西方の快樂を慕んとするのを目的となす。

第二正修門は「六八の願海を尋ねて來迎の舟楫を詳め、

二八の觀門を開いて往生の樞鍵を顯さむ」ために、その内容は九段に分れている。

第一段は①無三、②不更惡道、③皆同金色、④無有好醜の四願と、「想、水想の二觀によつて、「念を西方に繫け」る。第二段は⑤宿住能憶、⑥天眼遍見、⑦天耳遠聞、⑧他心悉知の四願と、宝地、宝樹、宝池の三觀によつて、「極樂を欣求」せしめる。第三段は⑨神足隨意、⑩離諸妄想、⑪住正定聚、⑫仏光無辺の四願と、惣想觀に依つて、「想を西方に運ばし」める。第四段は⑬仏寿無量、⑭声聞無數、⑮眷屬長壽、⑯遠離不善の四願と花座、像想の二觀に依て、「憑みを弥陀に繫」けしめる。第五段は⑰諸仏稱揚、⑱十念往生、⑲聖衆來迎、⑳繫念定生の四願と仏身觀によつて、「正しく念仏を修せ」しめる。第六段は㉑具足諸相、㉒必至補処、㉓供養諸仏、㉔供具如意の四願と、觀音、勢至の二觀によつて、「念仏を助成せし」める。第七段は㉕説一切智、㉖得金剛身、㉗万物殊妙、㉘見道場樹、㉙得辨才智、㉚智辨無窮、㉛徹見十方、㉜妙香合成の八願と、普觀によつて「自心を練磨せ」しめる。第八段は㉝觸光柔軟、㉞聞

名得忍、^{③⑤}聞名転女、^{③⑥}聞名梵行、^{③⑦}聞名敬愛、^{③⑧}衣服隨念、^{③⑨}常受快樂、^{④⑩}見諸仏土の八願と、雜想觀によつて、「行者を勸進」する。第九段は^{④⑪}聞名具根、^{④⑫}聞名得定、

^{④⑬}聞名貴家、^{④⑭}聞名具徳、^{④⑮}聞名見仏、^{④⑯}随意聞法、^{④⑰}聞名不退、^{④⑱}至三法忍の八願と、三輩往生觀によつて、「正しく引接を期せん」とするにある。以上が正修門の大綱であり、四十八願と十六觀の、各その次第順序によつて組織せられているが、九段の中禱五正修念仏が枢要をなすことは、言うまでもないところである。

後に伎楽歌詠を用いることについて、重ねて「鹿言軟語皆第一義に帰す、散乱歌詠、盍んぞ解脱の門とならざらんや。沉んや能く声音を調べて極楽界を讃じ、聊か伎楽をなして弥陀尊に供す。響音には皆妙法を唱え、歌曲には悉く浄土を慕^{ねが}う、琴瑟鼓吹、並びに徒然ならざんや」と述べ、「業は心に由つて転じ、行は願に由つて引く」とは回向の義となすのである。之れ本講式一部の大綱であつて、此の中に管絃供仏の殘粹を見出すことが出来る。

(四)

前節において本講式に載せられた四十八の願名について記したが、今この願名を望西楼了慧の「無量寿經鈔」に挙げたところの、淨影、義寂、法位、玄一、慧心、靜照、真源、憬興、智光、御廟、光、感師等のそれと對比して、全く願名を一にするものは、真源のそれのみである。無量寿經鈔の中に真源の四十八願釈の願名を挙げるものは、第一、第三、第四、第五、第十、第十一、第十四、第十五、第十六、第十八、第十九、第二十、第二十七、第三十一、第三十二、第三十三、第三十五、以下第四十八に至る三十願についてである。此の一事について云えば、本講式の作者は長西録所伝の真源説は肯定せざるを得ない。故に講式の各願の略註と真源の四十八願釈との關係についてみれば、望西楼の引用するところは七願に過ぎないが、今これを対照すれば、

願名

四十八願釈

順次往生講式

⑩離諸妄想

遠離我我所無^レ
有^二諸妄想^一又云
不起想念貪愛身

遠離我々所無有諸
妄執

⑪聖來衆迎

欲生彼国仏与聖衆
來迎

同上

⑫繫念定生

聞^レ名繫^レ念願^レ生無^レ
不^二果遂^一

同上

⑬万物殊妙

万物跋淨無^二称量^一

彼界万物窮^レ微極
^レ妙無^レ能^二称量^一

⑭妙香合成

所有万物百千種香
合成

同上

⑮聞名転女

女人聞^レ名生生不^レ
^レ為^二女身^一

女人聞^レ名生々永
不^レ為^レ女

⑯聞名敬重

聞^二彼仏名^一一切人
天皆敬愛又云聞名
信樂得^二礼敬^一

聞^二彼仏名^一一切人
天敬愛

右の如くであつて、これによつて望西楼時代には、明らかに真源の「四十八願釈」が、講式と共に現存したことが知

られる。

更に本講式を実修する目的について「聖衆來迎之望無^レ過^レ憑^二弥陀悲願^一、往生極樂之業不^レ如^レ觀^二極樂依正^一」と明せるが如く、弥陀の悲願を憑み、浄土の依正を觀察するにある。されば無量寿經と觀無量寿經を所依とすること、及び四十八願名については既に述べたところであるが、望西楼の「無量寿經鈔」に「真源云」として願名を明記するものの中、今の所明と異るところは、たゞ大經鈔には第三十七願を「聞名敬重」、第四十三願を「聞名生貴家」とするに對し、本講式の正修門第八段に「聞名敬愛」とし、第九段には「聞名貴家」となしている。かかる得名の相違が個人中に存することは、この両者の成立の前後を示唆するものであつて、全四十八願名を稍意を損してまで、四字に整頓したことは、後日同人の手により修正を加えたものと見られるからである。

又本講式は「例時作法」に影響を受けるところが多い。即ち五念門中礼拜門の、龍樹の願往生礼讚偈の劈頭の四句一頌を「述意門」に引き、正修門には作願門の四十八願頌を

九段に分けて收め、廻向門には四十華嚴行願品の「願我臨終命終時」等の四句と、再び礼拝門の「我說彼尊功德事」等の四句一偈を引いて結びとしている。尙ここに注目すべき点は、四十八願積の題名を一見することによつて、四十八願頌との連関性多く、寧ろ四十八願頌の示唆により、その呼称を付したとすら考えられる。しかし四十八願頌の作者の何人なるかの如何に拘らず、「例時」に負荷することろ多きことは、本講式作者の宗教的環境を知ることが出来る。更に真源の往生極楽の業としての、極楽の依正を觀想する十六觀の呼称については、天台、善導、慶滋保胤、靜照等によつたものと思われ、特に靜照において見られなかつた、善導觀經疏の影響を、彼か濃厚に受けていると見られることは、特に北嶺における善導の浄土教学受容過程上注意を払うべきことである。

扱て作者真源について、その事蹟の詳細を知ることが出来ないが、諸書に散見するところを摘記すれば

①浄土依憑經論章疏目錄 往生要集裏書一卷 真源

証揚律師山僧 (仏全一、三四六)

順次往生講式について

②明匠等略伝 真源 勝陽房 阿闍梨 (仏全四、一三三)

③諸宗章疏録 松養坊真源 破邪弁正記二卷

惠什疑_二伝教血脈_一 真源救_二彼難_一

④自在金剛集卷第八 破邪弁正記二卷 勝陽房 仁和寺惠 葉侘

什疑難山家相承脈譜、葉侘撰二卷 救之、天仁二年己丑臘月撰述大疏 啓蒙云、松養房真源法橋述 更詳

(仏全三四、三三一)

⑤三国伝記卷第七 和云、叡岳東塔南谷勝陽房真源法橋

云人アリ、四明山ニハ、乘_二一乘宝車_一觀_二解脱究竟理_一、三密瑜伽牖中 至_二一念道場_一修_二本党法身_一、真源 師範也嚴算阿闍梨參会、公夫人也；

(仏全一八四、三五七)

の如くであつて、以上の諸点を綜合して考察すれば、真源は永觀と同時代の天台宗の浄土願生者であつて、又その生

存年代から推して、文化都市支配階級の嗜好に応同したスタイルの講式を編み出した、新感覚と浄土思想鼓吹の善功には、驚嘆に値いするものがある。

註① 例えば法華八講、同十講同、二十八講、同三十講の如きもの唯識講、大乘義章講、因明講、三論三十講、俱舍十講等あり

② 彌陀講、釈迦講、涅槃講、舍利講等
③ 觀音講、地藏講、彌勒講等

④ 樸陽講、慈恩講、世親講等、報恩講
⑤ 太子講、聖靈講等

⑥ 三季講、四季講、光明真言講、念仏講等
⑦ 孟蘭盆講、鍔守講、会中講、遺跡講等

⑧ 岩波文庫本 二四頁
⑨ 同 上 五〇頁

⑩ 仏全、統浄卷六、九頁
⑪ 同上 四九頁

⑫ 同上 七八頁
⑬ 同上 八六頁

⑭ 五十五善知識講式、光明真言講式、涅槃講式、羅漢講等が最もよく知られている。

⑮ 善財童子講式、法華講等七部ある。
⑯ 詳細は「京寺遺宝授英」第一集参照。
⑰ 信玄書写とするは高野辰之博士「日本歌謡六二赤史」三頁。

⑱ 松俊秀博士「京寺遺宝授英」第一集二四頁。

⑲ 岩波文庫本 一八四頁
⑳ 同上 二二〇頁

㉑ 惠谷教授「叡山静照の浄土教」(印度学仏教学研究第七号)の図示に本講式の十六観名を付加し 対照すれば左の如くである。

天台	觀經疏	善導	觀經疏	保胤	十六	極	樂遊	意順	次往生	講式
日	觀日	觀日	觀日	觀日	觀日	觀日	欠	日	想	觀
水	觀水	觀水	觀水	觀水	觀水	觀水	想	觀水	想	觀
地	觀地	觀地	觀地	觀地	觀地	觀地	想	觀地	想	觀
樹	觀樹	觀樹	觀樹	觀樹	觀樹	觀樹	想	觀樹	想	觀
池	觀池	觀池	觀池	觀池	觀池	觀池	想	觀池	想	觀
總	觀寶	觀寶	觀寶	觀寶	觀寶	觀寶	想	觀寶	想	觀
華	觀華	觀華	觀華	觀華	觀華	觀華	座	觀華	座	觀
座	觀座	觀座	觀座	觀座	觀座	觀座	觀	觀座	觀	觀
佛	觀佛	觀佛	觀佛	觀佛	觀佛	觀佛	座	觀佛	座	觀
身	觀身	觀身	觀身	觀身	觀身	觀身	觀	觀身	觀	觀
音	觀音	觀音	觀音	觀音	觀音	觀音	觀	觀音	觀	觀
勢	觀勢	觀勢	觀勢	觀勢	觀勢	觀勢	觀	觀勢	觀	觀
普	觀普	觀普	觀普	觀普	觀普	觀普	觀	觀普	觀	觀
往	觀往	觀往	觀往	觀往	觀往	觀往	觀	觀往	觀	觀
生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀	觀生	觀	觀
雜	觀雜	觀雜	觀雜	觀雜	觀雜	觀雜	觀	觀雜	觀	觀
明	觀明	觀明	觀明	觀明	觀明	觀明	觀	觀明	觀	觀
佛	觀佛	觀佛	觀佛	觀佛	觀佛	觀佛	觀	觀佛	觀	觀
上	觀上	觀上	觀上	觀上	觀上	觀上	觀	觀上	觀	觀
品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀	觀品	觀	觀
中	觀中	觀中	觀中	觀中	觀中	觀中	觀	觀中	觀	觀
品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀	觀品	觀	觀
生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀	觀生	觀	觀
下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀	觀下	觀	觀
品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀	觀品	觀	觀
生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀	觀生	觀	觀
下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀	觀下	觀	觀
品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀	觀品	觀	觀
生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀	觀生	觀	觀
下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀	觀下	觀	觀
品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀	觀品	觀	觀
生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀	觀生	觀	觀
下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀	觀下	觀	觀
品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀	觀品	觀	觀
生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀	觀生	觀	觀
下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀	觀下	觀	觀
品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀	觀品	觀	觀
生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀	觀生	觀	觀
下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀	觀下	觀	觀
品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀	觀品	觀	觀
生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀	觀生	觀	觀
下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀	觀下	觀	觀
品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀	觀品	觀	觀
生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀	觀生	觀	觀
下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀	觀下	觀	觀
品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀	觀品	觀	觀
生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀	觀生	觀	觀
下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀	觀下	觀	觀
品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀	觀品	觀	觀
生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀	觀生	觀	觀
下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀	觀下	觀	觀
品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀	觀品	觀	觀
生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀	觀生	觀	觀
下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀	觀下	觀	觀
品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀	觀品	觀	觀
生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀	觀生	觀	觀
下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀	觀下	觀	觀
品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀	觀品	觀	觀
生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀	觀生	觀	觀
下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀	觀下	觀	觀
品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀	觀品	觀	觀
生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀	觀生	觀	觀
下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀	觀下	觀	觀
品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀	觀品	觀	觀
生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀	觀生	觀	觀
下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀	觀下	觀	觀
品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀	觀品	觀	觀
生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀	觀生	觀	觀
下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀	觀下	觀	觀
品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀	觀品	觀	觀
生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀	觀生	觀	觀
下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀	觀下	觀	觀
品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀	觀品	觀	觀
生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀	觀生	觀	觀
下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀	觀下	觀	觀
品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀	觀品	觀	觀
生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀	觀生	觀	觀
下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀	觀下	觀	觀
品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀	觀品	觀	觀
生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀	觀生	觀	觀
下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀	觀下	觀	觀
品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀	觀品	觀	觀
生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀	觀生	觀	觀
下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀	觀下	觀	觀
品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀	觀品	觀	觀
生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀	觀生	觀	觀
下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀	觀下	觀	觀
品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀	觀品	觀	觀
生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀	觀生	觀	觀
下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀	觀下	觀	觀
品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀	觀品	觀	觀
生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀	觀生	觀	觀
下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀	觀下	觀	觀
品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀	觀品	觀	觀
生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀	觀生	觀	觀
下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀	觀下	觀	觀
品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀	觀品	觀	觀
生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀	觀生	觀	觀
下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀	觀下	觀	觀
品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀	觀品	觀	觀
生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀	觀生	觀	觀
下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀	觀下	觀	觀
品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀	觀品	觀	觀
生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀	觀生	觀	觀
下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀	觀下	觀	觀
品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀	觀品	觀	觀
生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀	觀生	觀	觀
下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀	觀下	觀	觀
品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀	觀品	觀	觀
生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀	觀生	觀	觀
下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀	觀下	觀	觀
品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀	觀品	觀	觀
生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀	觀生	觀	觀
下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀	觀下	觀	觀
品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀	觀品	觀	觀
生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀	觀生	觀	觀
下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀	觀下	觀	觀
品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀	觀品	觀	觀
生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀	觀生	觀	觀
下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀	觀下	觀	觀
品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀	觀品	觀	觀
生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀生	觀	觀生	觀	觀
下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀下	觀	觀下	觀	觀
品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀品	觀	觀品	觀	觀